

木を診る木を知る

柏木(いぶき)は、米原市清滝のほぼ中央、徳源院参道の北側にあります。(いぶき)としては滋賀県内最大級の巨木で、昭和50年に旧山東町(現米原市)の天然記念物に、平成3年に県の自然記念物に指定されています。

その昔、この地を治めた京極氏が伊吹山より一株の苗木を投げ、その飛んだところを墓地に定めようとしたところ、ここまで飛んできたのがこの樹といいう由来があります。

現在、幹周り4.8m、樹高約10mをはかり、樹齢は700年を超えるといわれています。

しかし、近年枯れ枝が目立ち樹勢の衰えが懸念されてきたことから、(財)日本緑化センターが全国で年間3ヶ所のみ対象となる林野庁の補助を受け、治療を行うこととなりました。治療については、(財)日本緑化センター、滋賀県樹木医会など専門家を中心、所有者、地域など多くの人々により行われま

す。

治療が実を結び、勢いのある青々としたいぶきの老樹に回復することを願ってやみません。(桂田峰男)



▲柏木

情報 BOX

- ◆埋蔵文化財活用シンポジウム
『湊・舟、そして湖底に沈んだ村
—まいばら発、びわこの水運・くらし1万年—』
考古学の成果のみならず、歴史学・民俗学の分野を交えて、米原から琵琶湖の湖上交通を探り、謎の湖底遺跡にもせります。
- 日程／平成21年3月1日(日)午後1時20分～
場所／米原市米原公民館(米原市下多良3-3)
内容／
 - 記念講演「琵琶湖の水没村伝承を探る」
林 博通 氏(滋賀県立大学教授)
 - 講演「琵琶湖の舟 一丸木舟から丸子船へ」
出口 晶子 氏(甲南大学教授)
 - 講演「朝妻湊と米原湊をめぐる人・物・舟」
岩崎奈緒子 氏(京都大学准教授)
- シンポジウム
コーディネーター 用田 政晴 氏(琵琶湖博物館研究部長)
パネラー 林 博通 氏、出口 晶子 氏、岩崎奈緒子 氏、中島 誠一 氏(長浜市立長浜城歴史博物館館長)

同時開催／企画展『湊・舟、そして湖底に沈んだ村』
場所／近江はにわ館 会期／3月1日～31日

◆米原市教育委員会では、下記のマップおよびリーフレットを作成しました。
「米原市遺跡散策マップ2 息長古墳群と関連遺跡」「米原市遺跡リーフレット」(6種類)

※7山津照神社古墳、8定納古墳群、9塚の越古墳、10アミタビ古墳他、11甲塚1号墳他、12息長広姫陵古墳を紹介しています。

◆◆編集後記◆◆

今回も見開き頁に琵琶湖博物館の用田さんの玉稿をいただいて、佐加太29号をお届けします■昨年から、市内に分布する埋蔵文化財を4つの地域に分けてマップ・リーフレットを作成しています■今回の表紙で琵琶湖岸と湖底の遺跡を紹介したのもその一環です。それぞれ挙げてみると■伊吹山麓の京極氏・大原氏の遺跡と山岳寺院群■古代豪族息長氏の古墳群と関連集落遺跡■琵琶湖に関する生活と生業、舟運の遺跡■古代からの交通の要衝としての街道と集落・社寺・靈山・城郭。です■毎年3月にシンポジウムを開催して米原市の魅力を内外にアピールします■今年のテーマは『湊・舟、そして湖底に沈んだ村』です。ここでも用田さんにお世話になります■入江内湖南岸の磯山城遺跡で見つかった2体の縄文人■丸木舟を漕いで内湖や琵琶湖を行き来し、内湖背後の里山に入り、ときに天野川を遡上して伊吹・靈仙の深山に分け入る■四季折々の幸を得ることができた米原市は縄文人の楽園です(山ノ神)

米原市文化財ニュース

佐 加 太 第29号

発行 平成21年1月10日
編集 米原市教育委員会
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地
米原市教育委員会まなび推進課
TEL.0749(55)8106
印刷 ビッグバードデザイン株式会社



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

第29号

2009年1月10日

滋賀県米原市教育委員会

琵琶湖に関わる遺跡群 —生活と生業の湖、人と物が行き交った湖の道—

米原市は近畿と東海・北陸を結ぶ道路・鉄道網の結節点として発展してきました。その半面、縄文時代から1960年代まで連続と続いた琵琶湖を利用した人の移動と物の輸送については、歴史のなかに埋もれようとしています。今回は湖に伴う遺跡を紹介します。

入江内湖遺跡 昭和19年の干拓まで米原駅の西側に広がっていた琵琶湖第2の内湖・入江内湖。その全域からは縄文時代早期の2体の人骨(磯山城遺跡)をはじめ、各時期の遺物が豊富に出土し、丸木舟も5艘見つかっています。

筑摩御厨跡遺跡 かつて、琵琶湖と入江内湖の間に長大な浜堤が形成されており、朝妻筑摩や磯の集落、筑摩神社(9世紀中葉鎮座)はこの上に営まれていました。現在の神社境内地は筑摩御厨跡遺跡に比定され、発掘調査では平安時代の遺物が出土しました。そのなかに「月足」「郡」などの墨書き土器や大小の刀子類・風字硯・転用硯・綠釉陶器など官衙的遺物が多く含まれていたことから、『類聚三代格』『日本三代実録』『扶桑略記』などの記事から、朝廷などへ食物を供給した宮内省大膳職の「筑摩御厨」に伴う遺物だと考えられています。

朝妻湊と米原湊 天野川河口南岸一帯には奈良時代から中世にかけての遺物が散布する「朝妻湊跡遺跡」があります。朝妻湊は中世以前の湖東の要津として多くの文献に登場します。東山道の美濃方面や北陸に通じる港で、ここから大津や坂本の港とつながる航路として大いに賑わっていました。しかし、天正年間(1573~92)に「長浜湊」が、慶長8年(1603)には彦根藩の三湊のひとつとして「米原湊」が

開かれると、次第に衰退していきました。

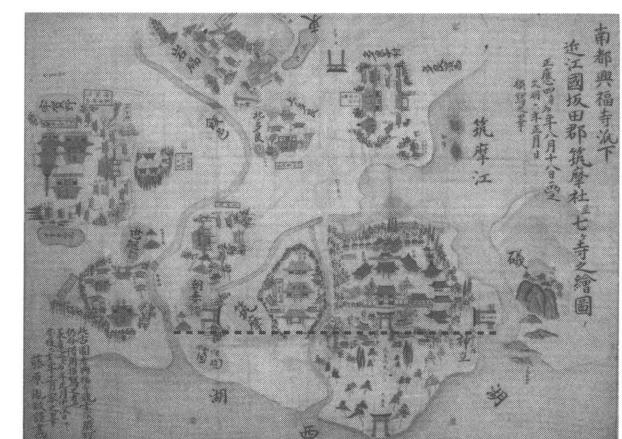
尚江千軒遺跡 筑摩神社を中心として、南の磯集落から朝妻湊推定地を北端とした湖底には「尚江千軒遺跡」があります。『近江国坂田郡志』や地元には

「正中2年(1325)10月21日の大地震で尚江と称する大村が湖中に水没した」との記述や口伝があります。また、筑摩神社には、正応4年(1291)に描かれ、2回の模写を経て江戸時代に写された『筑摩神社並七ヶ寺之絵図』があり、筑摩神社の北と南の湖岸に描かれた「西邑」「神立」の2村と湖岸の大鳥居が現在見られないことから、湖中に陥没したと考えられます。滋賀県立大学の調査では、朝妻湊跡の湖底で12世紀中葉を中心とする土師器皿・須恵器甕・山茶碗・常滑焼片口鉢などが多数発見されました。筑摩神社沖では、7~8世紀の須恵器横瓶を共伴する石群が確認され、湖岸に築造された横穴式石室墳と副葬品の可能性が指摘されています。また、人為的に掘りこまれた2基の土坑が確認され、検証の結果、これらの遺構は大地震などで一気に湖底に沈下した可能性が高いようです。集落そのものの遺構が見つかっていないため、まだまだ謎の多い湖底遺跡です。(高橋順之)

参考文献／2004『尚江千軒遺跡』(滋賀県立大学人間文化学部)



▲明治時代の地形



▲筑摩神社絵図 (破線より下が水没推定地)

伊吹山寺にみる中世山岳寺院祖型

滋賀県立琵琶湖博物館研究部長 用田政晴

1はじめに

密教は、原始的な山岳信仰が仏教と結びついてはじまり、近江においては伊吹山がそうした修行の場の一つとなって、今もいくつかの山岳寺院跡が残っている。

かつて本誌上で伊吹山の上平寺を取り上げ、上平寺城跡として知られる中世山城が山岳寺院を利用して営まれた可能性⁽¹⁾を述べたことがある。今回は、その上平寺と同じ伊吹山寺の一つ弥高寺との比較を通じて、中世山岳寺院の祖型的構造を見つけ、さらにそれが小谷城などの原型となつたことを看取していきたい。

2 上平寺城にみる山岳寺院要素

上平寺城は京極氏の山城として知られ、伊吹山から南に延びる刈安尾と呼ぶ尾根の先端、隣の尾根にのる弥高寺よりやや低い標高669m地点を中心にしてその遺構が残る⁽²⁾（図1右）。

標高669mの尾根の頂部に南北約50m・東西約35mの主郭を置き、その南下方に向かって直線的に伸びる道をはさんで曲輪が続いているが、曲輪の間には堀切や堅堀を配置し、いくつかの曲輪の周囲には土塁がめぐる。

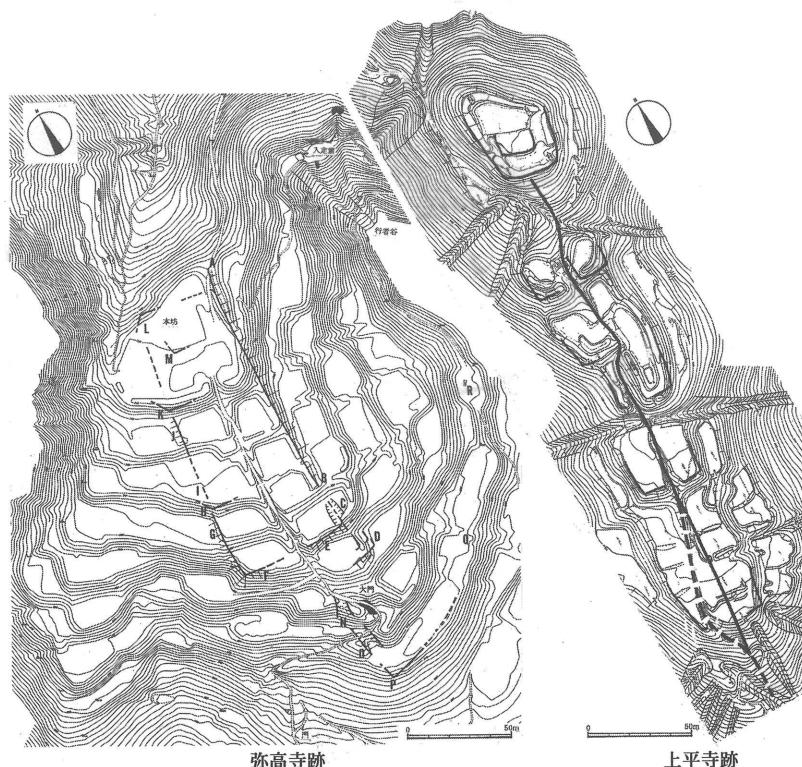


図1

この上平寺城は、典型的な伊吹山の山岳寺院を中世後期段階で城郭に改変したものであり、その上平寺城の麓に広がる上平寺館跡についても、山上の寺院をそのまま移した痕跡であると考えた。

尾根上頂部には、他と隔絶した規模で二段からなる中心的曲輪があり、奥の北半部分が山岳寺院にみる本堂の基壇状を呈している。それを頂点として、南に向かって小規模な曲輪が規則的に展開する。これらの曲輪の真ん中を直線的に走る南北の独立した道があり、この左右に8つの曲輪が展開する。南北に走る直線道は、現在は迂回して中心的曲輪・主郭に取り付くが、かつては南から直線的につながっていた痕跡が現地に残る。これらは、「本坊」とそこから南に延びる道を主軸として坊跡群が展開する弥高寺の在り方と基本は同じで、典型的な中世前期の山岳寺院形式である。そして土塁や堀切は後の城郭関連施設と考えられる⁽³⁾。

3 弥高寺にみる山岳寺院の祖型

前章で、北端の本堂跡を頂点にして、南北に伸びた道の両側に8つの坊跡が展開する山上の上平寺、すなわち『紙本著色上平寺城絵図』に単純化されたその平面構造は、山の尾根上に展開した山岳寺院の基本形ではないかと推定した。その考えに沿って弥高寺を観察・再検討することにした（図1）。

弥高寺本坊跡から南に延びる坊跡群中ほどの道は、ほぼ真南に向かう。この点は上平寺にも共通する。本坊跡東側のはじまりAからBまではほぼ一直線であり、約45度の急角度で東側に落ち込むように整形されている。またそのBからの延長線上にあるC付近の坊跡は、Cの部分のみ地表面が落ち込んでいる。このことから、もともとC付近から東側は盛土によって拡張したため、地盤が軟弱になったものと考えられる。

また、その南側側辺も急角度で落ち込み、これら本坊にはじまるひとまとまりの坊跡群の南限とみることができる。そのことは、道をはさんだ西側坊跡にも共通し、特にその南西角付近では顕著である。その角から北に向かってG付近までは同様に一直線で急角度をなすが、H付近ではそれが見えなくなる。ただ、このHの斜面を詳細に観

察すると角度を持って整形されており、I付近の等高線でもわかるように、Jまで一直線につながっていた坊跡を復原可能なものにしている。

こうして南北に走る道の両側に左右対称で展開した8つの坊跡であるが、本坊跡の平面形は、必ずしも道を中心とした対称形ではない。ただ、その南側側辺のK付近には明瞭に斜面の平面角度変換点が認められ、二段になった本坊跡の基壇も等高線では明らかではないが、M部分は角度を持っており、逆にL付近にもコーナーを持った削平が認められる。

このように本坊を北の頂点とし、おおよそA、C、E、F、Lをつないだ長方形の坊跡群配置が浮かび上がり、先に見た上平寺と相似形になる。

なお、Eのさらに南の先、D付近でもコーナー地形が部分的に認められるが、道をはさんだ反対側には見られない。また、「大門」跡と呼ばれ、後の城郭の枠形虎口として改変された部分を観察すると、NおよびO付近は線状に落ち込んでおり、それは本坊跡から南に延びた道の延長線上に位置する。その道はPで直角に左に曲がり、少なくともQまで伸びていた模様である。

今、地形を詳細に見直すことによって浮かび上がってきた、本坊跡を頂点として南北約140m・東西約50mの範囲の中心の道沿いに、8つの坊跡が左右対称に広がり、道はまっすぐ延びた後、東へ直角に折れて向かう平面形式は、この弥高寺の原型となつたものであると考えられる。

つまり上平寺と弥高寺は同じ平面形を祖型として構築されたものであり、これらは同じ伊吹四大寺の長尾寺、太平寺にも共通すると想定され、さらには弥高寺が山麓に降りた後、唯一、その法燈を護っている悉地院の平面形式そのものである。この形式を読み取ることをここでは「伊吹山寺祖型論」あるいは「原型論」と呼んでおくが、必ずしも伊吹山寺に限ったものではないよう、戦国大名浅井氏の居城・小谷城の本丸や大広間跡を中心とする平面図⁽⁴⁾に、部分的な測量図⁽⁵⁾を合成して作成したものを見ると（図2）、その平面形、規模、方位などほとんどが上平寺と酷似する。このこ

とは、別稿にて詳述することにするが、少なくとも近江北半に共通する山岳寺院の原型式であるという見通しと共に、小谷城が山岳寺院を、しかも山王丸付近とあわせて二ヶ寺にわたって城塞化していることが読み取れるのである。

注

- (1) 用田政晴「上平寺城・山岳寺院論の提唱」『佐加太』第22号、2005年。
- (2) a 高橋順之『上平寺城跡群分布調査概要報告書III 上平寺城跡-京極氏の山城跡-』（『伊吹町文化財調査報告書』第17集）、伊吹町教育委員会、2002年。
b 高橋順之『上平寺城跡群分布調査概要報告書I 上平寺館跡-京極氏の居館跡-』（『伊吹町文化財調査報告書』第12集）、伊吹町教育委員会、1998年。
- (3) 高橋順之「放射状の堅堀群を確認-上平寺城(桐ヶ城)跡-」『佐加太』第17号、2002年。
- (4) 柴田 實「小谷城址」『滋賀県史蹟調査報告』第7冊、1938年。
- (5) 中村林一『史跡小谷城環境整備事業報告書』、湖北町教育委員会、1976年。

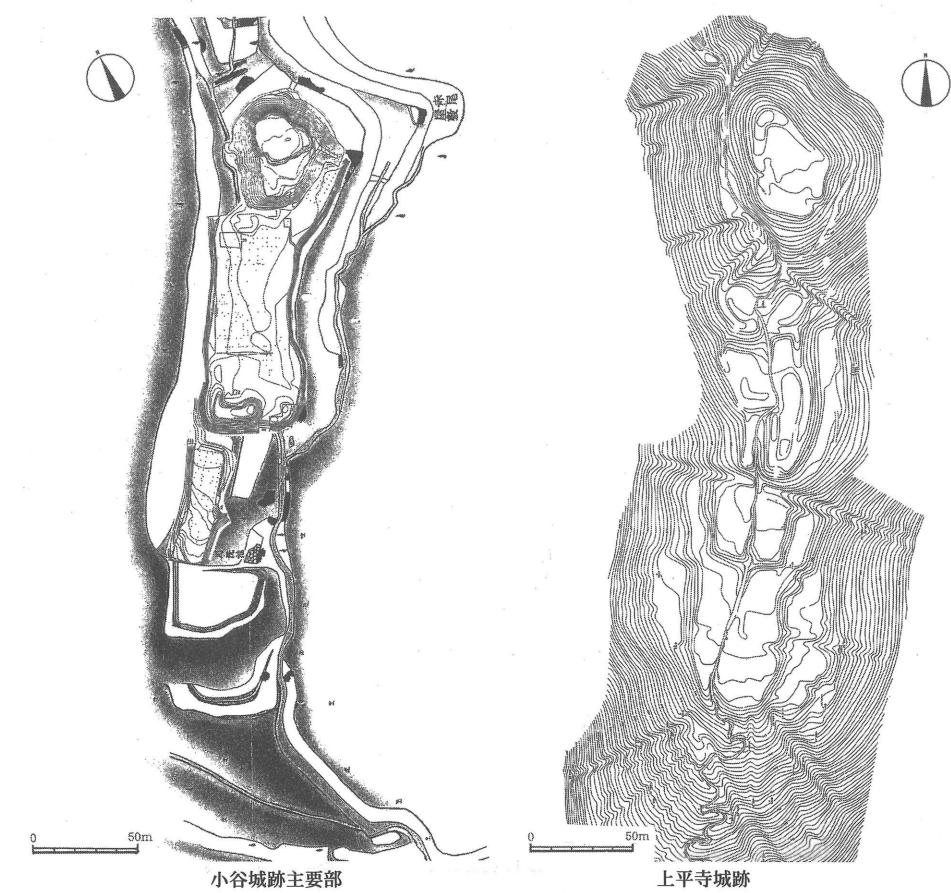


図2